

上川北部地域の高齢者介護施設における自立支援ケアプランの取組に関する調査研究

著者	木下 一雄
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	138-139
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001814/



課題研究要旨

上川北部地域の高齢者介護施設における 自立支援ケアプランの取り組みに関する調査研究

木下一雄*

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

1. 研究目的

平成 25 年度に行った厚生労働省の調査結果によると、高齢者虐待の原因となっている要因として、介護職員の教育や知識、技術に問題があったとされるケースが調査全体の総数の 66.3%を占めており、いかに介護職員に対する教育力が現場で低下しているのかが、数字として目に見える形として表れてきている。

つまりは、今の介護職員にとって倫理観、想像力の欠如、利用者が今まで歩んできた人生を含め、包括的にとらえていくアセスメント能力が欠如してしまった結果が、このような不祥事につながってきているのではないだろうか。

本稿では、自身が勤務していた認知症専門病棟の精神科病院において 20 代男性介護職員に対し、利用者に関わる上で筆者自身が考案した面接指導プログラムに添った支援を通して、いかにその指導プログラムを受けたことにより、対象者自身が利用者に対する関わり方の変化があったのかについて報告し、上川北部地域の高齢者介護施設における自立支援ケアプランを通じて、今後の高齢者介護施設のあり方について考察していく。

そして、凄惨な状況が繰り返されている現場において、利用者に対する想像力を豊かにし、言葉で表現できない表情やしぐさなどに意識を向け、様々な思いをアセスメントしていくことの重要性について示唆していく。

2. 研究方法

名寄市周辺にある高齢者介護施設に勤務している職員の方々からのインタビューによる調査を行い、半構造化面接にて質問していく。記録媒体として IC レコーダーを使用した。まず施設内においてどのような取り組みを進め、自立支援型ケアプランの取り組みを進めていっているのかについて調査を進め、上川北部地域での問題点や過疎地域が抱えている高齢者介護支援体制の課題等を明確化させ、過疎地域における要介護者の支援モデルのあるべき形について研究を行った。

3. 調査・研究期間

調査に関する資料収集	平成 28 年 10 月～平成 28 年 12 月
インタビュー調査に関する打ち合わせ	平成 29 年 1 月～平成 29 年 2 月
インタビュー調査実施	平成 29 年 2 月～平成 29 年 3 月
調査の整理と研究結果のまとめ	平成 29 年 2 月～平成 29 年 3 月

4. 倫理的配慮

個人情報や施設での情報が外部に漏洩する危険性やプライバシーを第 3 者に知られることがないよう配慮し、入手した情報は、研究以外に試用することはなく、自らの研究室において厳重に管理し、研究終了後は、

*責任著者 E-mail:kinoshita@nayoro.ac.jp

個人が特定される情報に関して、シュレッダー処理、データ削除等の対応を行った。本学の倫理委員会の承認を得て実施した。

5. 結果と考察

結果として、この研究の意義としては、現場における経験より介護職場では、日々の業務に追われてしまい、個別性に配慮をする視点やスキルが確立されているとは言いがたく、介護の質的側面からかなりの危機感を感じていた。

施設にいる利用者が、日々生活してきた家庭や友人、また本人が今まで身を置いてきた職業や地域社会など、本人にとっての大切にかけがえのないもの、築き上げてきた環境と切り離されてしまい、見知らぬ場所で喪失感を抱えて生活している。当たり前的事であるが、介護サービスを受けている利用者は、一人ひとり悩みや苦しみの種類も違っており、人の人生の数だけ悩みや苦しみが存在している。

人の生活は個別的で、環境の違いや人間関係や社会経験など、一人として同じ人などおらず、その人に適した個別的な介護支援やサービスの対応が必要になってくる。介護職員は、このような課題に直面する利用者に対して、しっかりと問題に向き合っていくことができる感性が必要なのである。

6. まとめ

利用者が求めているニーズは、ただ単に課題を抱えている重度介護者といった見方をしているだけでは、本人の真のニーズを把握することはできない。相手の人生を踏まえ、尊重し、相手が暮らしてきた生活や人生、そして性格や趣味、過去の職業などをしっかりと踏まえた上でアセスメントしていく視点が必要である。目に見える身体面のことばかりに目を奪われることなく、いろいろな角度から多面的に見ることが重要であり、しっかりと想像力を働かせて、丁寧に関わっていくことが大切である。つまり、介護職員は医療者的な見方ではなく、介護福祉の専門職の立場から、利用者を病者として捉えるのではなく、利用者が持っている健康な部分に着目して、一人の生活者の視点に立って、できる限りその健康な部分を伸ばしていく視点を忘れてはならない。そのような視点を持ち、本人の真のニーズを反映したケアプランを作成することが重要であることがわかった。

7. 今後の課題

今後、これから目指すべきケアプランとしてもっとも大切なことは、利用者の本意をつかむことであり、表面上の言動や行動と心の中で抱えている本心の違いを感じ取り、把握できる判断能力を身に付けていくことこそがケアプラン作成者に求められているスキルであると言える。そのため、利用者それぞれの思いをくみ取ることを大切にしたい、できるだけその人のできる力をひき出していくプロセス重視のケアプランの作成を意識することによって、利用者自身のできる能力を活用し、自立支援につながるケアプランを作成することができるかが今後の課題となってくる。